

## 詩のみなもと（12・2・18）

粟津則雄（昭23・文乙）

「詩のみなもと」というタイトルから、文学史的な詩歌起源論のような話を期待していらつしやるかも知れませんが、私はそういうことは精しくないし、実を言うと、あまり興味もないんです。今日私がお話したいのは、私自身が、詩のみなもとに触れたように感じたさまざまな経験なんです。これは、必ずしも、出来あがった詩歌作品との出会いといったことだけじゃない。たとえばこんなことがありました。

まだ戦後間もない頃です。私の一家は、経済的に困窮した上に父が身体をこわしたため、それまで暮っていた京都から父の生まれ故郷である北江州の田舎に移り住んで居りました。私は東京で下宿暮らしをしながら大学に通っていたんだけど、休暇などで家へ戻るたびに、近くの農家の老人が、早速私を訪ねて来るんです。もちろん、お百姓のおじい

さんと大学生とでは、共通の話題などほとんどないわけで、まずたいいは彼が一方的にしゃべりまくるだけでした。そのじいさんは、村では道化者で通っていましたね、女房がいかにも暴力的で、嫁がいかに情なしであるかといった話を、奥さんに薪でぶんなぐられたあとを腕まくりして見せながら、道化した口調でまくし立てるんです。彼が私を訪れて来るのも、別に私に好意を持ったわけじゃなくて――まあ嫌いだったら来ないでしょうけど――こういう彼の話をまぜつかえしもせずに聞いてくれる相手を見つけたというだけのことかも知れません。

ある冬の休みに家に帰ると、例によつて彼は早速やつて来ましたけれども、どうもいつもと様子がちがう。勢いこんで何かしゃべり始めても途中で黙りこんでしまうんです。変だなと思つているうちに、彼がその秋に長男を急病で亡くしていることに思い当たりました。ああそのせいかと思つておくやみを言つたんですが、彼は泣き笑いでもしているように顔を歪めましてね、例の道化した口調で、「何たらいうバカ高い薬をジャンジャン飲ましたんやけどな、あかんかった。死んでしもた。ブクブクノブーや」と言うんです。それからぼんやりと窓外の冬空を見上げていましたが、ふとまた表情が變つて、「赤いトンボがツイツイ飛んどつたが」と呟いたものです。私も見上げましたが、もちろん冬空にトンボ

なんかいるはずがない。でも私には「赤いトンボ」の幻が見えた。それが、じいさんの悲しみの象徴のように、まるで悲しみそのものが飛んでいるかのよう、白っぽい冬空に「ツイ」飛んでいる姿がはつきり見えただけです。「赤いトンボがツイツイ飛んだったが」、もつとも奥深い感情に触れたことがおのずからことばを生んだという点で、これはまさしく「詩のみなもと」じゃないでしょうか。じいさんは、それまで詩など読んだことはないでしょうし、詩というものの存在さえ知らなかったかも知れませんがね。

同じ頃ですが、こんなこともありました。チエーホフの奥さんのオリガ・クニツペルは、モスクワ芸術座の名女優なんだけれども、彼女がチエーホフの臨終の日のことを書いているんです。たまたまその文章を読んで強く心を動かされました。チエーホフの病いが重くなってもう臨終が近いというので、親戚や友人が多勢彼の枕もとに集まっていたんですが、彼は、その人たちに、次々とこっけいなコントを即席で話してきかせるんです。彼が若い頃は、チエーホフというペンネームで数多くのこっけいなコントを書いていたことを思い出させますが、聞いていた人たちはこういうときであるにもかかわらず、思わず腹をかかえて笑ってしまったということです。やがて、チエーホフは、口をつぐみ、目をとじ。そしてもうその目をあけることはなかったとオリガは書いています。

葬式の準備もありますから人びとが引きとったあと、オリガはただひとり残つて、チェーホフの、「何もかもわかつてしまったような」と彼女が言う美しい顔を眺めていたのですが、庭の闇のなかから、黒い蛾の群が飛び込んで来て、壁にぶつかつたり、床に落つこちたりしながら、飛びまわつたと言ふんです。その蛾の群を眺め、夫の死顔を眺めながら、彼女は無量の想いで心をいっぱいにしていたでしょう。私には看病疲れで蒼さめたオリガの顔がはつきりと見えました。黒い蛾の群の姿も、彼らが立てる物音も、私がいかにその場にいるようでしたね。この黒い蛾の群は、あのお百姓のおじいさんが見た「赤いトンボ」のようなものでしょうね。

こうして枕もとに笑っているうちに時が過ぎてゆきます。だんだん、夜が明け始めるんですよ。そうすると、生活の音が響き始めるんですよ。あちこちで、ドアの開けしめする音、中庭で何か大声で叫び合う声、馬車を仕立てて出て行く音、バタバタとどこかたたいている音。そういう音が聞えてくる。生活の音ですね。そういう音を聞いて、オリガ・クニツペルは、アントンが―チェーホフですね―アントンが、本当に死んでしまつてもう二度と帰つて来ないことがはつきりわかつたと言ふんですね。

何もかもわかつてしまったようなチェーホフの死顔。その顔を黙つて眺めているオリガの蒼さめた顔。しんとしずまりかえっている夜の気配。空から飛び込んで来る黒い蛾の群。

やがて夜が明け、きこえて来る生活の音。こういう時の移りゆきはまさしく詩じゃないでしょうか。もちろん、彼女に、詩的な文章を書くなどという意識はまったくなかったでしょうけどね。

こういうのはいろんな形でありまして、たとえば、こういう話もある。昭和二十二年に幸田露伴が亡くなります。お嬢さんの幸田文さんが枕元についていた。ある日、露伴が枕元にいた文さんの手を握って、「もういいかい」と言った。何のことかわからないでしょう。はたと思い当たって、つまりもう死ぬよ、ということだと思い当たって、文さんが「よろしゅうございます」と返事をした。そうするともう一度手を握って、「じゃあ俺もう死んじゃうよ」と言った。

これは岩波書店の小林勇さんという人がその場において、エッセイに書いているんです。その二日か三日後に亡くなるんですけど、亡くなった露伴を前にして、文さんが言った言葉があるんです。「お父さん、お静まりなさいませ」。いい言葉だねえ。詩だねえ。露伴というのは要するに荒れ狂う魂だったわけですからね。非常に激しい個性の持ち主です。文さんが書いてる父親の教育などからもわかるけど、非常に激しい。荒魂です。その魂で歩いてきた露伴に向かって、死に顔を見ながら、「お父さん、お静まりなさいませ」。誰でも

言えるような言葉じゃない。私はこれもやっぱり詩だと思っんです。

こういう詩を感じるのには、たとえば正岡子規のお母さんの場合もそうなんです。明治三十五年の九月に子規が亡くなるんですけども、明け方、隣の部屋に弟子たちが詰めてるんです。それまでうんうんうなってる子規の声が聞こえなくなった。様子を見にお母さんの八重さんが行ってみると、亡くなってた。その時のことを、子規の高弟の河東碧梧桐という人が書いてるんです。

ぐったりした子規を八重さんが抱き起こして、どう言ったか。「もう一度、痛いと言うておみ」、そういうおぼさんの目からは涙がぼろぼろこぼれていた、ということを書いてます。脊椎カリエスですからね、激痛を伴うわけです。人間がこんな苦痛を感じるものか、と書いているほどの激痛ですよ。モルヒネで抑え込んでるんだけど、抑えきれない時があるんです。それでしょっちゅう泣き叫ぶわけです。痛い痛い。それを八重さんはずっと見守り看病してきましたよ。

この八重さんという人はたいへん気丈な人でね。ものに動じなかった人らしいけど。夫も早く亡くしてますし。そういう人が、不縁になって帰ってきた娘の律とともに子規の看病をしたわけでしょう。黙って、非常に激しい心の苦痛に耐えてやってきた。その子規が

今、自分の腕の中でぐったりとなつている。最後に発した言葉が「もう一度、痛いと言うておみ」。これも私は詩だと思つています。重いですよ。痛いと言つてくれ、ということばは。号泣し、絶叫する息子を支える生活の中で耐えてきたのがあふれ出た。お母さんというのはそういうものでね。もう一度痛いと言つてくれ。こういうところから離れると詩は詩じゃなくなるような気がいたします。

詩を書く場合、どんな細工をしたつていいんだよ。でもその根幹にね、今申し上げたよ。うな、「お父さん、お静まりなさいませ」というのがなきやだめだろうし、「赤いトンボがツイツイ飛んどつたが」というのがなきやだめでしょう。そういうところに常に立ち戻りながら、あれこれと新しい表現を作ることには必要ですよ。詩人はね。だけど根幹に、あらゆる人間がそれを感じて、言葉にするような時の、根本的な衝動がなければ、これは詩じゃないと思つています。

また、こういうこともある。戦後間もない頃「創元」という季刊雑誌が出ました。戦後のあの貧乏な時代にたいへん豪華な紙を使つてね。小林秀雄さんが監修していた。そこに吉野秀雄さんという歌人の歌が百数十首載っていました。それまで吉野秀雄なんていう存

在も知らなかったし、歌も読んだことがなかったけれども、大変感動しました。良く覚えてるこんな歌がある。「これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹」。戦争中に奥さんが病気で亡くなったんです。亡くなる前に秀雄に抱いてくれと言ったんですよ。

「炎立ちせよ」とは、欲望を燃えあがらせて欲しいということ。この私の最後の思い出に私を抱いてくださいな、と迫ったのでしよう。そういう妻の姿を想い起しながら、作者は彼女に「吾妹吾妹」と呼びかけるのですよ。これはまさしく、夫婦愛の極致です。これはけつして異常な出来事を歌っているわけじゃない。日常のなかで、人間の心のもつとも奥深いものに触れた瞬間なんです。これも、詩のみなもとに触れたということじゃないでしょうか。そういう意味では、あのお百姓のおじいさんや、オリガ・クニツペルや、子規のお母さんのことばと、相通じているんですよ。

これも同じ頃、たまたま雑誌で宮沢賢治の『永訣の朝』という長い詩を読んで強く心を動かされました。宮沢賢治は、妹のトシさんを大変愛していましたけれども、彼女は大正十一年の十一月に、肺結核のために二十五歳で亡くなります。この詩は彼女が亡くなる日の朝、「永訣の朝」のことを歌っているんですよ。詩は



けふのうちに

とほくへいってしまふわたくしのいもうとよ

みぞれが降つておもてはへんにあかるいのだ

というふうに始まるのですが、賢治は詩のなかに、彼女が苦しい息の下から兄に語りかけたことばをちりばめているんです。まず彼女は「あめゆじゅとてちてけんじゃ」、「積つているみぞれをとつて来て下さいな、賢治にいさん」と言います。少し先の方では、今度はローマ字で「Ora orade shiori Eguno」、「私は私でひとりで死んでゆきます」ということばが引かれる。さらに終りの方では

うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

ぐるしまなあよにうまれでくる

ということばが出て来る。賢治の「自註」によれば

またひとにうまれてくるときは

こんなにじぶんのことばかりで

くるしまないやうにうまれてきます

という意味のようですが、いいことばですね。ここには感傷もなければ未練もない。乱れ

もなければ焦りもない。死を前にして、存在自体がすぎとおってしまっています。そしてそのことがそのままことばになっているんです。

もうひとつあげておきましょうか。さつき、小林秀雄さんが編集していた「創元」という雑誌で吉野秀雄の短歌を読んだと申し上げましたが、同じ号だったかひとつ前の号だったか忘れましたが、やはり「創元」で、草野心平の『わが叙情詩』という長い詩を読んでこれにもびつくりしました。吉野秀雄とはちがって、草野心平についてはすでにいくらか知っておりました。ただそれはもっぱら「蛙の詩人」としての草野心平で、蛙を主題としたいくつかの詩も読んでおりました。もともと、「変った詩人だな」という程度の印象しかなかったのですが、この『わが抒情詩』でそういう印象は一変しました。詩は

くらあい天そらだ底なしの。

くらあい道だはてのない。

どこまでつづくまつ暗な。

電燈ひとつついてやしない底なしの。

くらあい道を歩いてゆく

というふうになります。そして、次の詩節では、全身からしぼり出したようなこんな叫

びがあげられるんですよ。

あああああ。

おれのころは。

どこいった。

おれのころはどこにゐる。

きのふはおれもめしをくひ。

けふまたおれは。

わらってゐた。

暗い詩ですね。でもこれは、戦後の暗い世相の反映なんてものじゃない。ここには当時のわれわれの周囲にはびこっていた甘ったるくべとついた感傷や自虐はまったくありません。読み進めるうちに、しっかりと大地を踏みしめた、まことに男らしい足音がきこえてくるんです。「あああああ」ということばに始まる嘆きの歌はそのあとも何度もくり返され、そのたびにますます詩は暗くなるのですが、やがてその暗さそのもののなかから、こんなことばが浮びあがって来ます。

人間はくりかへしにしても確たるなんかのはじめはいまだ。

とくにも日本はさうなので。

考へることにはじまつてそいつをどうかするやうな。

さういふ仕掛けになるならば。

がたぴしの力ではなくて愛を求め。

さういふ道ができるなら。

例へばひとりに。

お茶の花ほどのちよつぴりな。

そんなひかりは咲くだらう。

それがやがては物凄い。

大光芒にもなるだらう。

いいですねえ。こういう希望や夢は、これまた当時世にはびこっていた、空疎で楽天的な、自由主義謳歌、民主主義謳歌とはまったく無縁のものです。詩人は、直截に、われわれの生の根幹に触れている。ここにも、詩のみなもとがあると私は思うのです。

御静聴、ありがとうございます。

(いわき市立草野心平記念文学館館長)